

**日本英文学会関東支部**  
**第 26 回（2025 年度秋季大会）**  
**プログラム**

**日時： 2025 年 11 月 9 日（日）**

**会場・開催校：東京農業大学 世田谷キャンパス 1号館**

〒156-8502 東京都世田谷区桜丘 1-1-1

**アクセス方法**

渋谷駅からお越しの場合

西口バスターミナルからバス約 30 分（小田急バス渋 26、東急バス渋 22、23、24）

千歳船橋駅からお越しの場合

小田急線南口から徒歩約 15 分・バス約 5 分（東急バス渋 23、用 01）

用賀駅からお越しの場合

東急田園都市線北口から徒歩約 20 分・バス約 10 分（東急バス用 01、渋 22）

**日本英文学会関東支部事務局**

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂1-2

研究社英語センタービル

Tel/Fax 03-5261-1922

E-mail: kanto@elsj.org

12:00	<p style="text-align: center;">開場・受付開始 (受付：2階 EV ホール、控室：2階 244 教室、書店展示：2階 241 教室)</p>			
12:30   12:50	<p style="text-align: center;">総会 2階 232 教室</p>			
	第1室 2階 231 教室	第2室 2階 232 教室	第3室 2階 242 教室	第4室 2階 243 教室
<b>研究発表 1</b>  13:00   13:40	<p>言語の伝承と物質性 ——『フランケンシュ タイン』を通して マーガレット・アト ウッド『オリクスと クレイク』を読む</p> <p style="text-align: center;">(発表者) 巖谷 薫</p> <p style="text-align: center;">(司会) 坪野 圭介</p>	<p>『ヴィレット』に おける女性の歩行 とコスモポリタン 都市——「想像力」 が掘り起こす歴史 の記憶</p> <p style="text-align: center;">(発表者) 山本 菜々美</p> <p style="text-align: center;">(司会) 侘美 真理</p>	<p><i>The Fall of Robespierre, An Historic Drama</i> における恐怖語彙 の詩的機能と革命 主体の変容</p> <p style="text-align: center;">(発表者) 宮崎 真弓</p> <p style="text-align: center;">(司会) 大石 和欣</p>	<p>アン・セクストンの 詩的子宮——他者の 声を産み出す臓器</p> <p style="text-align: center;">(発表者) 小野 佳奈子</p> <p style="text-align: center;">(司会) 来馬 哲平</p>

<p><b>研究発表 2</b></p> <p>13:50   14:30</p>	<p>権威の二源泉—— J. M. Coetzee の Samuel Beckett 論と <i>Dusklands</i> について——</p> <p>(発表者) 紺野 直伸</p> <p>(司会) 小山 太一</p>	<p>ベケット「ダンテ …ブルーノ・ヴィ ーコ…ジョイス」に おける整然性の ジレンマと機械的 手続き</p> <p>(発表者) 江刺 佳紘</p> <p>(司会) 鈴木 哲平</p>	<p>Wanna 縮約再考： 言語獲得の視点から</p> <p>(発表者) 田中 竹史</p> <p>(司会) 天沼 実</p>	<p>開催なし（控室）</p>
<p><b>部門別 シンポジウム</b></p> <p>14:40   16:40</p>	<p><b>【シンポジウム 1】 イギリス文学部門 2 階 231 教室</b></p> <p>ヴィクトリアン・デザイン のゆくえ——ラスキン、 アーツ・アンド・クラフツ 運動、そしてモダニズムへ</p> <p>(司会・講師) 輪湖 美帆 (講師) 菊池かおり (講師) 川端 康雄</p>	<p><b>【シンポジウム 2】 アメリカ文学部門 2 階 232 教室</b></p> <p>現代アメリカ演劇に おける多様性と変遷</p> <p>(司会・講師) 松本美千代 (講師) 谷 佐保子 (講師) 有馬 弥子 (講師) 伊藤 寧美</p>	<p><b>【シンポジウム 3】 英語学・英語教育部門 2 階 242 教室</b></p> <p>これまで、そしてこれからの 英語教育について</p> <p>(司会・講師) 志手 和行 (講師) トム・ゴーラム (講師) 須永 豊</p>	

開場・受付開始 (12:00 より 2 階にて)

**13:00-13:40 【研究発表 1】**

第 1 室 (2 階 231 教室)

(発表者) 早稲田大学大学院博士課程 巖谷 薫  
(司会) 成城大学准教授 坪野 圭介

言語の伝承と物質性——『フランケンシュタイン』を通してマーガレット・アトウッド『オリクスとクレイク』を読む

本論では、マーガレット・アトウッドの「マッドアダム三部作」を第一巻『オリクスとクレイク』(2003)を中心に、メアリ・シェリーの『フランケンシュタイン』(1818)と比較する。そして後者における怪物と、前者における科学者クレイクが開発した次世代の人間「クレイカーズ」の言語習得過程と神話を分析する。『フランケンシュタイン』の怪物が子孫も筆記物も残さず消え去ったのに対し、『オリクスとクレイク』の人造人間は、人間と混淆した子孫に言語を伝承し、はっきりとした物質である本を残すまでに言語能力を発達させた。この分析に基づき、『オリクスとクレイク』における教育者の重要性を本論では指摘する。さらに本作で、筆記物の描写を通じて言語の物質的側面が強調されている点を論証する。これらの点から、人間の言語を中心とした世界観を批判しつつ、その生き残りへの希求をアトウッドが本作で示していることを本論は主張する。

第 2 室 (2 階 232 教室)

(発表者) 成城大学大学院博士後期課程 山本 菜々美  
(司会) 東京藝術大学教授 侘美 真理

『ヴィレット』における女性の歩行とコスモポリタン都市  
——「想像力」が掘り起こす歴史の記憶

Charlotte Brontë の *Villette* (1853) は大英博覧会開催の直後に出版され、当時イギリスで高まっていたコスモポリタンな空間への関心を背景にもつ。先行研究では、主人公 Lucy Snowe が都市の広がりの中で様々な困難を経験しながらも主体性の確立を模索すると論じられてきた。本発表ではそれらの議論を踏まえつつ、Brontë が女性の歩行を効果的に用いて、コスモポリタン都市 *Villette* における二項対立的な空間——多様な人々が集まる近代的な中心街 (Haute-Ville) と抑圧の痕跡を残す荒廃した旧市街 (Basse-Ville) ——に光を当てていることに着目する。物語の終盤、Lucy は擬人化された「想像力 (Imagination)」に突き動かされて都市を歩きまわらる中で、そうした二項対立が揺らぎ、交差する瞬間に出会う。都市文学としての *Villette* を読み直しながら、本発表は Brontë がどのように男性的秩序にもとづくコスモポリタン都市の空間表象を再編しているのかを明らかにしたい。

### 第3室 (2階 242教室)

#### *The Fall of Robespierre, An Historic Drama*における恐怖語彙の詩的機能と 革命主体の変容

(発表者) 東京大学大学院後期博士課程 宮崎 真弓  
(司会) 東京大学教授 大石 和欣

サミュエル・テイラー・コウルリッジとロバート・サウジーによる歴史劇 *The Fall of Robespierre, An Historic Drama* (1794) は、ロベスピエール派の失脚直後に制作された、フランス革命に対する詩人たちの即時的な応答である。本発表では、感情表現と構造的配置に着目し、とりわけ第一幕において、外圧的な恐怖を示す“terror”ではなく、内面的な不安を示す“fear”の語が反復される点に注目し、人物間の恐怖という感情の連鎖がクーデターの要因として描かれていることを明らかにする。また、第二幕では、歴史的事件が復讐劇として再構成されることで、史実が演劇的寓意へと昇華され、登場人物達の情念や倫理的葛藤が浮き彫りとなる。そして第三幕では、個人の名が消失し、歴史の主導権が無名の群衆へと移行する構造が提示される。詩的構造と感情表現の分析を通じて、これまで文学史的に顧みられることの少なかった本作を、同時代の混迷と詩人たちの応答を読み解く手がかりとしたい。

### 第4室 (2階 243教室)

(発表者) 東京大学大学院修士課程 小野 佳奈子  
(司会) 青山学院大学准教授 来馬 哲平

#### アン・セクストンの詩的子宮——他者の声を産み出す臓器

本発表では、アン・セクストンの詩世界に繰り返し現れる「出産」や「子宮」のメタファーに注目し、他者としての男性や女性の声を生み出す詩的構造を読み解くことで、告白詩＝自己語りという通念に批判的視座を提示する。

セクストンは、告白詩の先駆的存在である W. D. スノッドグラスら男性詩人たちの影響を享受しながらも、女性として、独自の詩作のあり方を追求した。今回は *Live or Die* (1966)収録の“Somewhere in Africa”と“Sylvia’s Death”、*Love Poems* (1969)収録の“In Celebration of My Uterus”において、語り手が女性の身体、特に子宮という臓器を媒介に、他者の声を産み出そうとする過程を読み解く。女性の子宮から産み出される声は、男性的な生命力や強靭さを付与された形で語り手の語りの中で変容を遂げる。こうしたセクストンの詩作は、第2派フェミニズム期のジェンダー秩序の中で、声を持たざる他者に詩の中で新たな声を与えようとする戦略的行為として位置づけられる。

## 13:50-14:30 【研究発表 2】

第 1 室 (2 階 231 教室)

(発表者) 東京大学大学院博士課程 紺野 直伸  
(司会) 立教大学教授 小山 太一

### 権威の二源泉——J.M. Coetzee の Samuel Beckett 論と *Dusklands* について——

作者は神か、あるいは寄生者か。南アフリカの作家 J.M.クッツェーがその活動最初期にサミュエル・ベケットを論じた文章には、キリスト教神学に基づく、物語論と権力論が一体化した独自の主張が散りばめられている。本発表では彼の一見矛盾した主張を分析し、それが彼のデビュー作 *Dusklands* (1974) にどのように反映されているかを明らかにする。

彼は論考において、作者・語り手・登場人物を三つの「階級」と表現し、上位の存在である作者から下位の存在へと「権威」が移譲される、と主張する。その一方で、彼は、作者は登場人物たちの発言を引用・改竄しているにすぎないとも主張する。クッツェーは小説の物語構造の中に権力関係を見て取る。その権力関係は彼の作品の中で、より複雑な形で見出すことができる。アパルトヘイト下に執筆活動を開始した作家として彼が選んだ表現方法について、物語論の観点から位置付けることをしたい。

第 2 室 (2 階 232 教室)

(発表者) 東京大学大学院博士課程 江刺 佳紘  
(司会) 江戸川大学教授 鈴木 哲平

### ベケット「ダンテ・・・ブルーノ・ヴィーコ・・・ジョイス」における 整然性のジレンマと機械的手続き

ベケットの「ダンテ・・・ブルーノ・ヴィーコ・・・ジョイス」(1929年、以下「ジョイス論」)は、ジョイスの『フィネガンズ・ウェイク』(1939年)の前身である『進行中の作品』(1923年執筆開始)を擁護するための文学批評である。本発表は、この批評の第一段落においてベケットが非難している類推による整然化と、第二段落以降でおこなわれる標題に掲げられた四者の整然化のあいだにある緊張関係に注目し、このジレンマを解消するためのベケットの手続きを明らかにすることを目指す。

先行研究においては、ベケットが四者の関係の連続性ではなく断絶を、同一性ではなく不一致を、秩序ではなく混沌を強調することで、間接的に整然化不能性を示したというのが定説となっている。だが、ベケットは、数の操作や数学的比喩を使用した分類の作業を通じて、四項を機械的に整理することには一定の成功を収めているように思われる。本発表は、この機械的手続きが、類推による同一視がもたらす整然性とは異なるレベルの整然性を形成している可能性について論じる。

(発表者) 日本大学准教授 田中 竹史  
(司会) 宇都宮大学教授 天沼 実

### Wanna 縮約再考：言語獲得の視点から

一般に、wanna は want to の“informal”な文脈における音声的な表現形と見なされ、また、両者は実質的に同一の要素として扱われることが多い。

- (1) a. They want to get a new car.  
b. They wanna get a new car. (Huddleston & Pullum 2002: 1616, 1617)

しかしながら、本発表では CHILDES から得られたデータに基づき、幼児による発話においては wanna の使用が want to の使用に先行するという事実を確認し、want to と wanna との間には formal と informal というスタイルの差以上の違いが存在すると主張する。そしてその違いは、want は VP 内に生起する動詞であるのに対して、wanna は VP 外に生起し動詞と助動詞の中間的な性質を持つという点にあり、このような統語構造上の相違が当該項目の獲得パターンに反映されているという可能性を追求する。

【部門別シンポジウム】 14:40-16:40

〈シンポジウム 1：イギリス文学部門〉 2階 231 教室

(司会・講師) 中央大学准教授 輪湖 美帆  
(講師) 大東文化大学准教授 菊池 かおり  
(講師) 日本女子大学名誉教授 川端 康雄

ヴィクトリアン・デザインのゆくえ  
——ラスキン、アーツ・アンド・クラフツ運動、そしてモダニズムへ

ヴィクトリア朝におけるデザインへの関心は、イギリス製品のデザインの向上を目指して 1837 年から官立のデザイン学校が創立され、1850 年代には装飾美術博物館が登場するなど、当初から強いものであった。ヴィクトリア朝中期から後期にかけては、John Ruskin の思想に影響を受けた William Morris がデザインや装飾芸術の世界に新たな息吹をもたらし、その教えが 1880 年代に興隆するアーツ・アンド・クラフツ運動の発展に寄与したことは有名であろう。デザイン史においては、主に Nikolaus Pevsner によって、モリスの思想は（主に大陸欧州や米国でまず発展した）モダニズムの出発点となったという説明もなされた。だがモダニズムに至るこうした見解に対しては、現在まで多方面から疑義も呈されている。本シンポジウムでは、May Morris や E. M. Forster、Evelyn Waugh らによる文学作品を軸に、イギリスの 19 世紀末からモダニズム期とそれ以降において、ヴィクトリア朝の〈デザイン〉思想がどのように継承/反発されていったのかを見直してみたい。

メイ・モリスの〈デザイン〉——“Lady Griselda’s Dream” (1898) を中心に

輪湖 美帆

ウィリアム・モリス (William Morris, 1834-1896) の次女メイ・モリス (May Morris, 1862-1938) が、特に刺繍の優れたデザイナーや制作者としてモリス商会で重要な役割を担い、アーツ・アンド・クラフツ運動においても大きな役割を果たしていたことは近年盛んに語られるようになってきた。またメイが父ウィリアムの著作集を編集し、自身も二編の戯曲を書いていることから、メイの文学的貢献についても再評価が進んでいるが、特に彼女の戯曲についてはさらなる研究の余地がありそうである。したがって本発表では、1898 年に *Longman’s Magazine* に発表され、これまで論じられる機会の少なかったメイの戯曲 “Lady Griselda’s Dream” を中心に扱いたい。具体的には、装飾芸術、服飾やデザインといった要素に注目してこの作品を読み直す。その際、ウィリアム・モリスの著作に加え、メイの他の文章や同時代のアーツ・アンド・クラフツ運動と女性との関係にも目配りし、彼女の作品や文章の中に見られる装飾芸術、服飾やデザインの捉え方の同時代的意義についても検討したい。

## ブルームズベリー・グループの「大いなる拡張」とその遺産

菊池 かおり

20世紀を代表する建築・美術史家ニコラス・ペヴスナーは、モダニズム運動の発展に寄与したアーツ・アンド・クラフツ運動の影響力を認めながらも、その後のイギリスにおけるデザイン文化の停滞を指摘したことで知られる。このような見解は長らく通説として受け入れられてきたが、昨今では「歴史的転回」とも呼べる新たな視点や解釈が加えられつつある。こうした潮流を踏まえ、本発表では、ヴァネッサ・ベルが言及したブルームズベリー・グループの「大いなる拡張」をデザインの観点から紐解く。同グループのデザインにまつわる思想や活動が、当時の社会や産業といかに関わり、いかに受け止められてきたのか、イーヴリン・ウォーの『ブライズヘッド再訪』（1945）を起点としながら、ブルームズベリー・グループの遺産をその意味とともに考えてみたい。

## 『ハウーズ・エンド』におけるラスキンの「鬱陶しさ」について

川端 康雄

E・M・フォースターの『ハウーズ・エンド』（1910）の作中人物レナード・バストは、自己研鑽のために読書をする。なかでもジョン・ラスキンを「英語散文の最大の巨匠」とみなし、彼を模範として自身の「スタイル」を形成するべく、大著『ヴェネツィアの石』を懸命に読んでいる。その様子を伝えるナレーター（あるいは作者）の語り口は皮肉に満ちているが、このヴィクトリア朝人が没後10年を経ても依然として権威的な著述家であったことを示している。フォースターにとっていかにも鬱陶しい存在であったと思いきラスキン。しかし両者を切り離すのではなく結び合わせると何が見えてくるか。本発表では、アーツ・アンド・クラフツ運動と田園都市運動の20世紀初頭における展開を確認しながらこの点を検討してみたい。その際、エドウィン・ラッチェンズ、ガートルード・ジーキル、エベネザー・ハワード、レイモンド・アンウィンらの仕事を参照することになるだろう。

\*\*\*

## 〈シンポジウム 2：アメリカ文学部門〉 2階 232 教室

(司会・講師) 日本大学教授 松本 美千代  
(講師) 早稲田大学非常勤講師 谷 佐保子  
(講師) 恵泉女学園大学名誉教授 有馬 弥子  
(講師) 大阪大学専任講師 伊藤 寧美

### 現代アメリカ演劇における多様性と変遷

松本 美千代

近年のアメリカ演劇の受賞作品は、多様性と包摂性を色濃く反映し、社会の複雑な現実を舞台に映し出している。2019 年以降、アフリカ系アメリカ人劇作家 6 名がピューリッツァー賞を受賞し、女性プロデューサーやノンバイナリー俳優の受賞も注目された。作品では難病、シングルマザー、クィア・アイデンティティー、女性の自立、アラブ系・中東系の視点、経済格差など、多様な価値観が描かれ観客の共感を呼んでいる。パンデミック後は、社会的孤立や人工知能 (AI) に焦点を当てた作品も登場し、人間関係や他者理解といった根源的な問いが再考されている。また、イギリスとアメリカの両国間で舞台作品の交流が活発化している側面も見られる。本シンポジウムでは、こうした多様性に関する潮流と政権交代後の社会変容が演劇に与える影響を考察していく。

### トニー賞受賞作品を中心にブロードウェイにおける多様性の変遷を探る

谷 佐保子

アメリカ演劇界における最高の栄誉であるトニー賞のなかでも最優秀ミュージカル作品賞はその年のブロードウェイを代表する顔として、商業的・文化的影響力が大きく、最も注目される賞である。興行収入が史上最高額に達し、パンデミックによる閉鎖から見事に回復した 2025 年 6 月の授賞式で、この栄冠を勝ち取ったのは韓国発の *Maybe Happy Ending* であった。このことは国際的な多様性の象徴と言える。また、2024 年の同賞を受賞した、*The Outsiders* は、S.E.ヒントンの小説が原作で、富裕層と貧困層の対立という社会経済の多様性を映し出している。これまでも、人種、ジェンダー、セクシュアリティを扱った数多くのブロードウェイ・ミュージカルがトニー賞を受賞してきた。その多様性に対する意識はパンデミックの中断期間にさらに高まり、非白人のキャスティングやクリエイティブチームの編成を含めて、より包括的な視点から推し進められてきている。本発表ではその特色と変遷について、トニー受賞作品を中心に概観していきたい。

アメリカ現代演劇の多様性に見る  
アラブ系、ムスリム系、パレスチナ系の孤立と被包摂の間の揺らぎ

有馬 弥子

2013年にアクターズ作 *Disgraced* がピューリッツァー賞を受賞してから十余年、その間にアメリカ文化の多様性のモザイクの一片を成すムスリム系、アラブ系を扱った作品の上演例は何点かあり、数点はトニー賞やピューリッツァー賞の候補に挙がるか受賞を果たした。中東系をめぐっては、同時多発テロの余波だけではなくルーツの地で戦禍が重なる苛烈な地政学的背景が移住先アメリカでの排斥の要因となってきた。その演劇界はそれらの問題と対峙しつつ独自の文化的アイデンティティを模索することを余儀なくされてきた。一方アメリカ現代演劇界、特にオフ・ブロードウェイは、その文化や歴史、時にはパレスチナ問題さえも受容し支援してきた事実もあることは注目に値する。2023年に言語とアイデンティティをめぐり揺れるイラン系を描いたトゥーシ作 *English* がピューリッツァー賞を受賞したこともまたアメリカ現代演劇の包摂性の証だが、*Disgraced* と *English* の間にムスリム系、アラブ系が孤立と被包摂の間で懊悩しつつ文化活動を展開してきた変遷を辿る。

ロンドンの主要劇場におけるアメリカ合衆国の黒人演劇の上演

伊藤 寧美

近年、*Leopoldstadt* (2020) や *The Inheritance* (2019) など、マイノリティの人々の生を重厚に描く戯曲がローレンス・オリヴィエ賞、トニー賞の双方でベストプレイ賞を受賞している。しかし歴代のベストプレイ賞受賞者を振り返ればその多様性は十分であるとは言い難い。特に黒人劇作家の受賞はいずれの賞でも極めて限られ、メインストリームの演劇において未だ十分に評価がされていない現状がある。本発表ではアメリカ現代戯曲のロンドン公演、特に黒人劇作家による作品の上演例を取り上げ、英米の演劇界における多様性の問題を考える。Branden Jacobs-Jenkins の *An Octoroon* (2014)、Jeremy O. Harris の *Slave Play* (2018) は、いずれも実験的で過激な作風がアメリカ初演時から話題を呼んでいたが、それぞれナショナルシアター、ノエル・カワード・シアターというロンドンの中心的な劇場で公演が行われた。これらの公演がロンドンの観客や批評家にどのように受け止められたのか、劇評をもとに議論を進めたい。

\*\*\*

## 〈シンポジウム 3：英語学・英語教育部門〉 2階 242 教室

(司会・講師) 東京福祉大学准教授 志手 和行  
(講師) 立正大学講師 トム・ゴーラム  
(講師) 日本大学教授 須永 豊

### これまで、そしてこれからの英語教育について

これまでの英語教育は、言語及び言語習得理論、外国語教授理論、そして生成系 AI の台頭といった社会環境からの影響を、実際のところ複雑に受けながら変遷していったと捉えられる。そういった実状を背景に、古くは「文法訳読法」から現在の「コミュニカティブ・アプローチ」とその派生版に至るまで、実に様々な教え方が英語授業の中で導入、実践されてきている。そして、現在ではそれらが折衷的に活用され、教室内指導の中で体現されていると言えよう。本シンポジウムではこのような背景を踏まえた上で、各登壇者が大学、あるいは中学・高等学校での自身の英語指導を振り返り、教授法の変遷に触れながら今後の指導に向けた提言を試みるものである。

### Is the Automation of Education through AI Possible? Perspectives from the Classroom and Future Prospects

Tom Gorham

In multilingual communication, technological advances such as Google Translate have transformed the paradigm of language comprehension. AI technologies built on machine learning have evolved beyond simple translation tools to serve as “educational partners” that explain learning processes and provide personalized support. By augmenting human instruction, they are reshaping educational practice across diverse learning contexts. In today’s classrooms, students increasingly turn to AI to assist with writing and assignments. This widespread use is not only changing learning behaviors but also compelling educators to reconsider established pedagogical frameworks. When teachers develop a sound understanding of AI and its capabilities, they can gain deeper insights into learners’ cognitive processes and deliver more personalized, adaptive instruction. The success of such integration depends not only on the technology itself but also on the educator’s capacity to guide its use in pedagogically meaningful ways. At the same time, new challenges have emerged, including the need to balance learner autonomy with AI dependence, to rethink assessment methods, and to redefine the educator’s role. This presentation draws on practical experience in software development and AI research to examine, from multiple perspectives, both the current obstacles and the future prospects of implementing AI in English language education.

## 洋楽を用いた一授業のこれまで、そしてこれから

須永 豊

一つの理系学部で23年ほど大学生を「定点観測」してきたが、その英語力は緩やかな下降線を辿った後、コロナ禍で急降下したと感じている。その間、楽しさを重視し、授業に洋楽を取り入れてきた。当初は学期中に数回、カンフル剂的に洋楽を使っていたが、今では自著『歌って英文法』を用い、毎回一つの文法事項を焦点に定め、それを一つの楽曲を通して指導している。最初の数年は、必要最低限の基本をまとめた「準備1～3」を自習しておくよう指導してきたが、今年度から3回の授業を使って「準備1～3」を解説した上で中間試験を課すなど、リメディアル色を強くしている。曲を聴きながら歌詞の空欄を埋めるグループワークを楽しんでいる学生が多い一方で、最初から諦めている学生も見受けられる。本発表を通して、「必要最低限の基本」とは何なのか、またそれを高校までにもう少し定着させることはできないのか、ご意見をいただきながら考えたい。

## 英語における正確さの涵養とは

志手 和行

正確に、そして流暢に外国語を使えるようにすることが外国語教育に求められる指導目標であることに異議を唱える者はいないであろう。これは様々な時代、社会環境の変遷を経た現在においても不変であると言える。日本の外国語教育において、「英語」を伝達手段としてコミュニケーションを図る資質能力の養成が求められている中、本発表では「正確さ」に焦点を置きたい。

「正確さ」と言っても様々な切り口から押さえていく必要がある。例えば、文法訳読法を介して培う場合と、ペア活動の最中にタスクの目標達成を心掛けながらの意味交渉の実践場面とでは、「正確さ」の捉え方は異なると言える。このように「正確さ」についてその捉え方を整理した上で、昨今注目されてきている「メタ文法能力」についても言及していく。また、発表者の大学での実践についても触れたり、参加の皆さまからのご経験も共有いただいたりすることで、「正確さ」の探究を目指したい。

## 会場アクセスマップ (※Google Maps をもとに作成)



## アクセス方法

渋谷駅：西口バスターミナルからバス約 30 分（小田急バス渋 26、東急バス渋 22、23、24）

千歳船橋駅：小田急線南口から徒歩約 15 分・バス約 5 分（東急バス渋 23、用 01）

用賀駅：東急田園都市線北口から徒歩約 20 分・バス約 10 分（東急バス用 01、渋 22）

## 懇親会について (17:15-19:15)

会場：国際センター1階カフェスペース

〒156-8502 東京都世田谷区桜丘 1-1-1

会費：5,500 円（事前振込）／6,000 円（当日支払） ※ご出席の場合、以下の URL または QR コードにて事前にご予約のうえ、会費は事前振り込みにて承ります（受付は Web アンケート申込先着順といたします）。※予約は 10 月 27 日（月）締切、事前振込は 11 月 5 日（水）締切です。

予約用 URL : <https://forms.office.com/r/rhWZfy5Er9>



予約用 QR コード